テレビ西日本賞

木という存在

福岡県八女市
八女市立矢部中学校1年
牛島　晴菜

私は、小学生までは福岡市などもっと都会に住みたいと思っていました。

でも、その考えが少し変わる出来事がありました。中学一年の夏に福岡市に行った時のことです。

買い物を済ませ、一息つき辺りを見わたすと、マンションや家がたち並び、とてもにぎやかでした。まさに、私が理想としているものでした。将来、こんなところに住んでみたいな。そんな気持ちばかりでした。

しかし、街の景色をみているうちに何か違和感を覚えました。それが何なのかはじめのうちは、自分でもよく分りませんでした。が、ふとした瞬間その答えが分りました。

一つ目は、色あいです。矢部村は、どこを見ても緑があり、そして色づく季節になると、もっときれいになります。それに対して、福岡市は、建物の色しかなく、少し暗いように感じました。森林は、色合いという大事な役割もしているのかなぁと思いました。

二つ目は、ぬくもりを感じるものです。矢部村は、製材所など木を切ったり加工したりする場所が多くあります。こうした所で出るいらなくなった切れはしを生かした作品が村のあちこちに沢山あります。中でも、木でつくったベンチやかざりものが多く、身近に木のぬくもりを感じることができます。それに対して、福岡市は、人々の声でにぎやかさが伝わってきました。私は、矢部村の特徴を生かしたぬくもりを感じた方がいいなぁと思いました。

福岡市には、街路樹などはあるものの、ほんの少しです。私は、この時気づきました。矢部村に居ることって幸せだということに。

福岡市から家に帰ってくると、その思いはますます強いものになりました。

家のまわりは、三百六十度どこを見ても木です。秋には、赤、黄色などたくさんの木が山を色とりどりに

してくれます。これを見ると、「秋だなぁ」と感じます。

木を見るだけで、いやされたり安心したりします。

福岡市から帰ってきて一週間たった時のことでした。大雨が降り、家の近くで土砂くずれが起こりました。大雨がおさまり、様子を見に行きました。すると、岩が道路に落ちるのを木が守ってくれていました。まるで、木と木が手をつなぎ、私たちを見守っているようでした。幸いにも、土砂くずれという程のものではなく安心しました。この大雨で起こった土砂くずれが、私に木は大切だということを、もう一度教えてくれたようにも感じました。

私は、この経験で木と私たちの生活の関わりについて考えることができました。店が多い、にぎやか、この二つの理由で福岡市に住みたいと思っていましたが、店が少ないからこそ実感できる、木のあたたかさ、大切さを教えてくれる矢部村に住みたい。そんな思いが強くなってきました。

今までは、あまり気にもしていなかった木のことなのに、外に行ってみると木という存在の大きさに気づけるのだなぁと思いました。